

2. クロマツ疎林ゾーンの植栽計画

2-1) クロマツ疎林ゾーンの植栽の特性

特性-1 クロマツ疎林ゾーンの高木はクロマツが主体で、ゾーン全体に分布する。

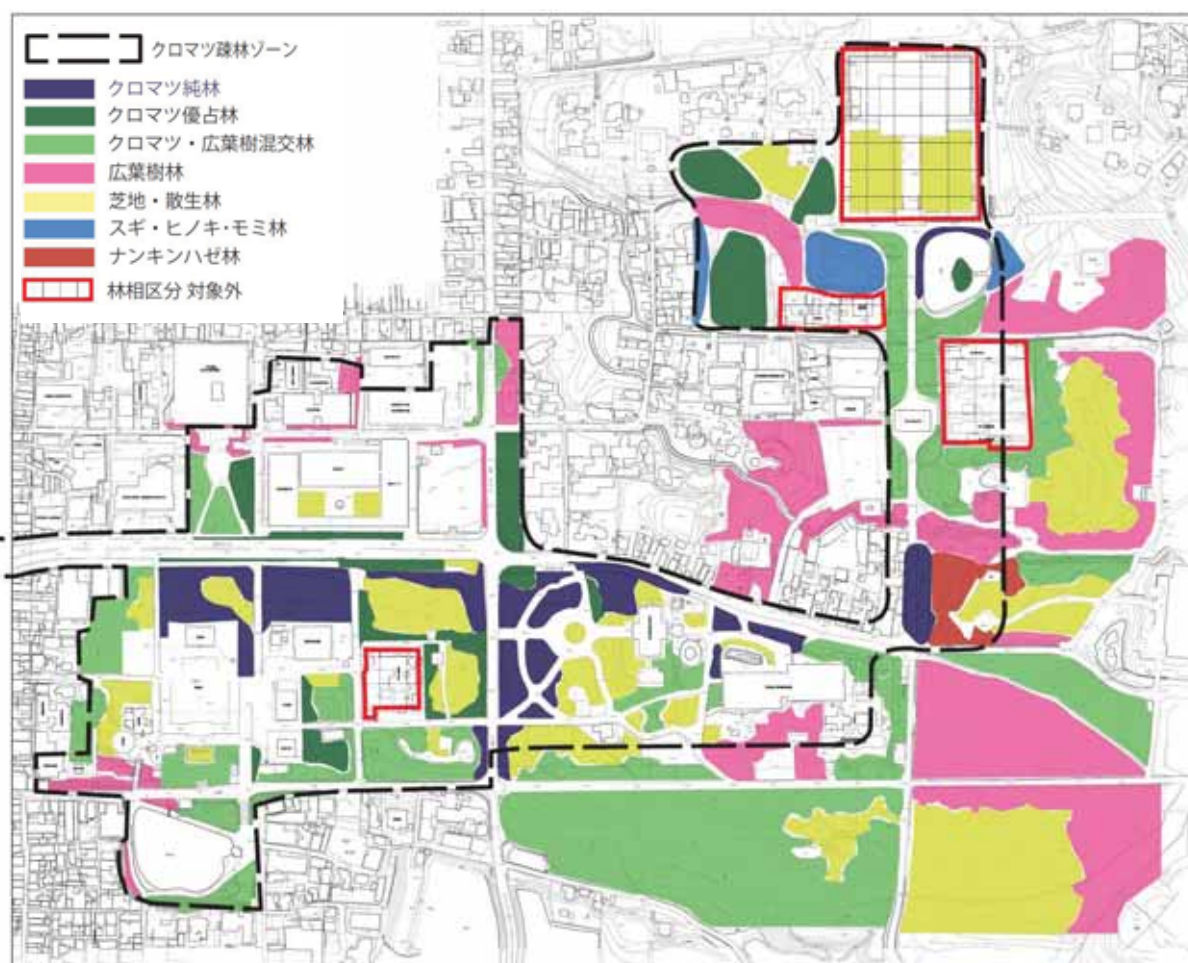
○計画区域内のマツの70%以上が、クロマツ疎林ゾーン内に位置する。

	樹木分布調査 全調査数(a)	クロマツ疎林ゾーン 計測数(b)	構成比(b/a)
マツ類	1,421	1016	71.5%
サクラ類	2,070	552	26.7%
カエデ類	1,507	402	26.7%

※1 樹木分布調査は、計画地の平坦部のうち主に開放空間を対象に調査している。(9月15日時点調査数)

※2 クロマツ疎林ゾーン計測数は、樹木分布調査をもとにクロマツ疎林ゾーンを50mメッシュで囲って計測した本数

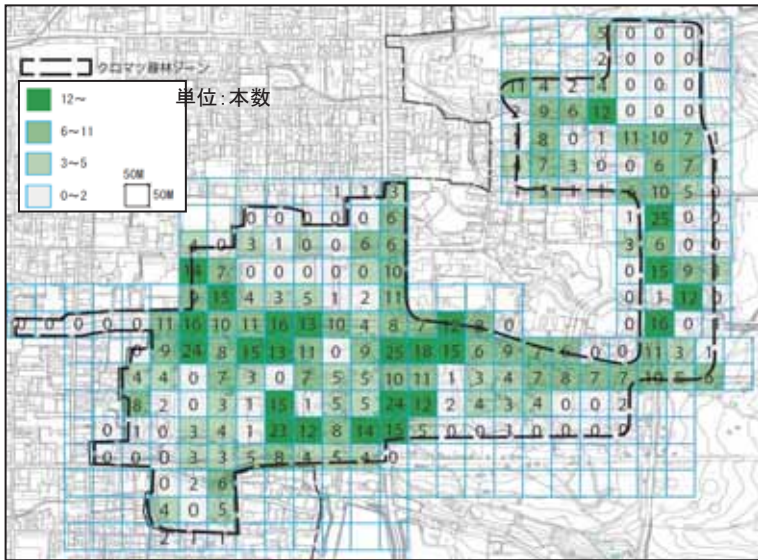
○クロマツ疎林ゾーンは、クロマツ純林、クロマツ優占林、クロマツ・広葉樹混交林が多く占める。



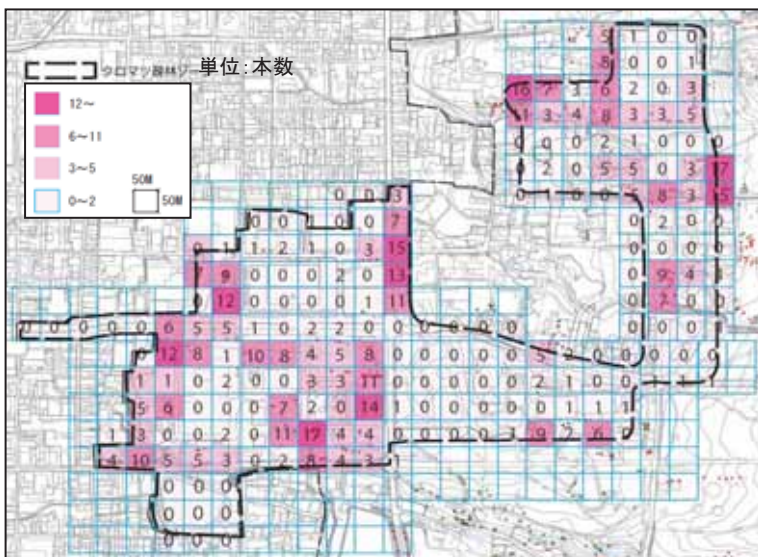
図：クロマツに着目した林相区分

○名勝奈良公園において本質的価値があるとされる樹種(マツ類、サクラ類、カエデ類、ウメ)の分布傾向は、クロマツ疎林ゾーンではマツ類がゾーン全体に広がる。

※作図は樹木分布調査に基づくもので、開放されていない敷地内の樹木は計測対象外である

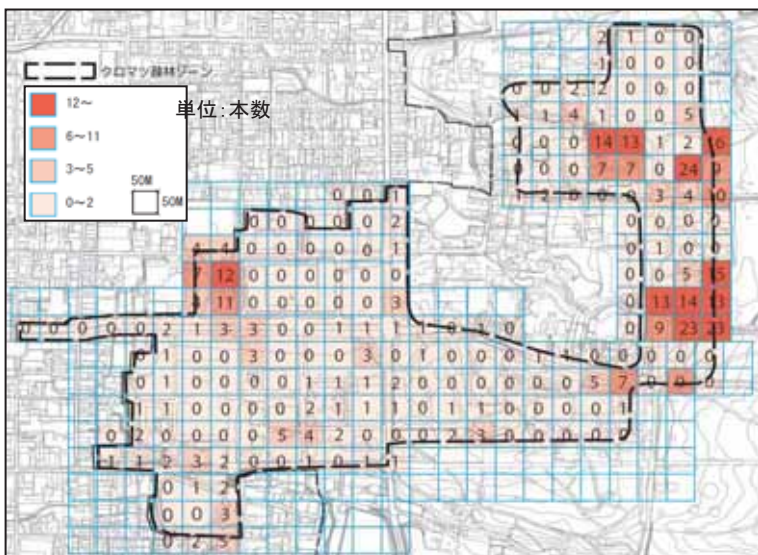


図：マツ類の分布傾向



・サクラ類は全体に分布しているが、猿沢池や博物館西側はほとんど見られない。

図：サクラ類の分布傾向

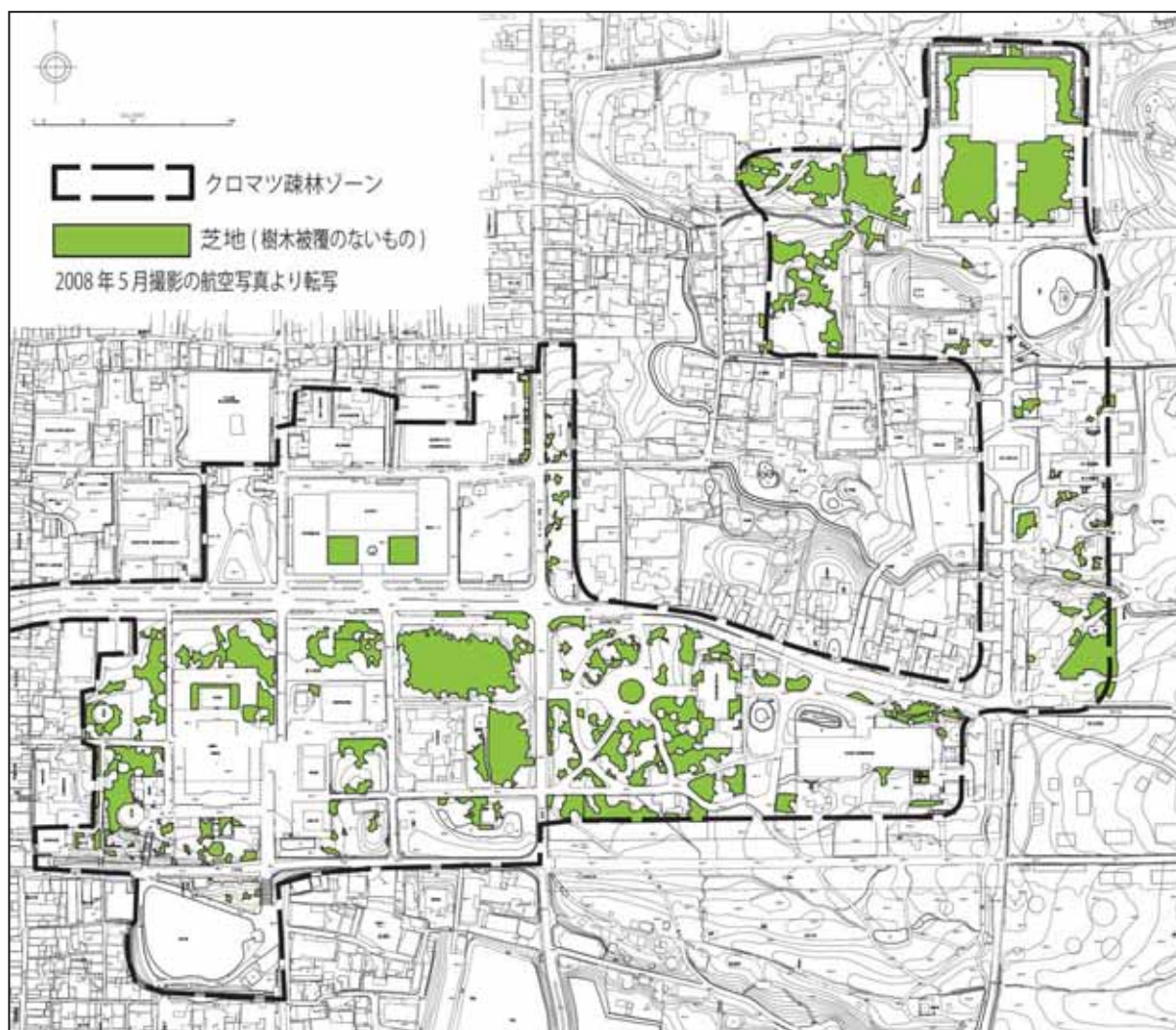


・カエデ類は、吉城川と白蛇川の川沿い、文化会館に多く分布している。

図：カエデ類の分布傾向

※ウメはごく一部に分布しており、その本数は限られている。

特性-2 クロマツ疎林ゾーン内の芝地はゾーン全体に分布しており、中でも公園区域と博物館構内、東大寺大仏殿西側の比率が高い。



図：芝地の分布

特性－3 クロマツ疎林ゾーンは、古くから風致を高めるために植栽され、現在も奈良公園の歴史文化的な風致景観を保全・継承している。

○興福寺や東大寺大仏殿の一带は、江戸期よりマツが多く見られた。



図：奈良名所東山一覽之図（幕末期※）

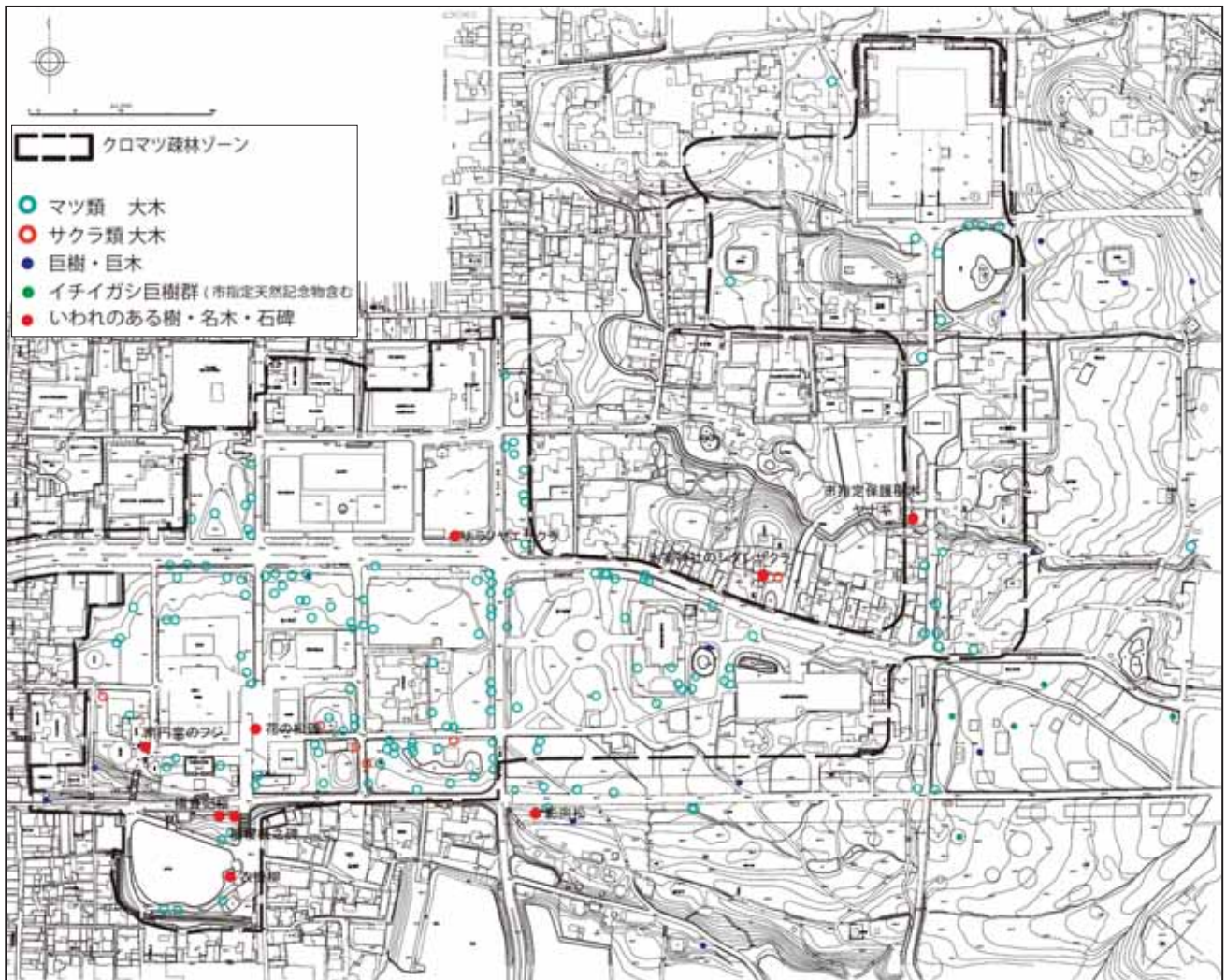
※絵画の内容、作者の経歴からすると 1850 年頃と想定される

○古くから風致のために植栽されており、それが現在も継承されている。

【主な植栽記録】（クロマツ疎林ゾーン関係）

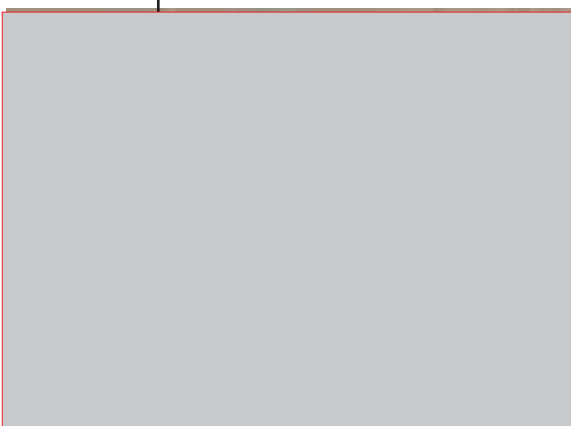
- ・嘉永 3 年（1850） 東大寺、興福寺境内に桜、楓を植栽。
- ・明治 8 年（1875） 興福寺境内に花木植栽
- ・明治 21 年（1888） 猿沢池池畔に枝垂柳、堤には霧島躑躅を植栽
- ・明治 22（1889）～同 36 年（1903）
公園平坦部に松、桜、楓、梅、百日紅、柳など約 9000 本を植栽
- ・明治 28 年（1895） 帝国奈良博物館 開館（松植栽）
- ・昭和 40 年（1965）
奈良の八重桜が県花指定。以降、公園の各園地に八重桜を 3000 本以上植栽。
- ・昭和 55 年（1980）
奈良公園開設百年記念植樹で公園、社寺、博物館にクロマツ 2300 本を植栽。

○クロマツ疎林ゾーンは名木や古木、いわれのある木が多く、枯死した樹木も更新されている。



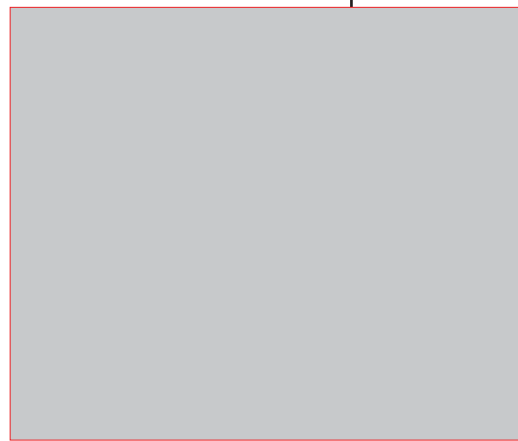
図：マツとサクラの大木・巨樹・いわれのある樹木の分布（H25 重要樹木調査）

マツの名木「花の松」



撮影年代不明（金堂及五重塔）

いわれのある木「衣掛柳」

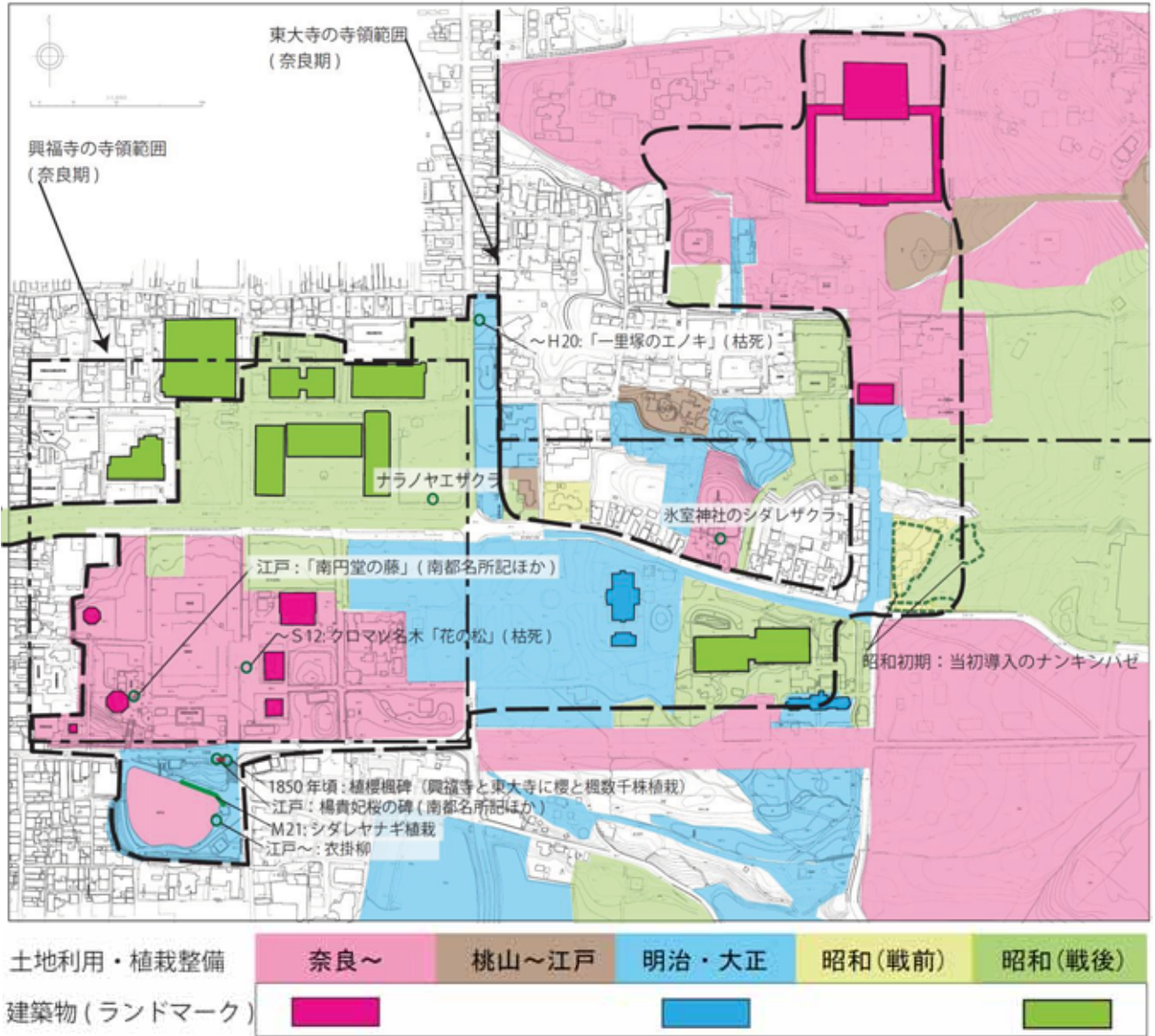


「大和名所図会」寛政3年(1791)

花の松 (興福寺東金堂前)	クロマツ	弘法大師の御手植えとされ、元禄時代に植えられた後代の花の松は樹高 25.5m、幹周り 5.4m の枝を大きく伸ばした立派な樹形であったが、昭和 12 年 (1937) 枯死。
衣掛柳 (猿沢池池畔)	シダレヤナギ	奈良時代の采女の説話にまつわる柳として、江戸時代の名所案内等に記される。

特性-4 クロマツ疎林ゾーンは土地利用や植栽整備の歴史が植栽や景観に色濃く反映されている。

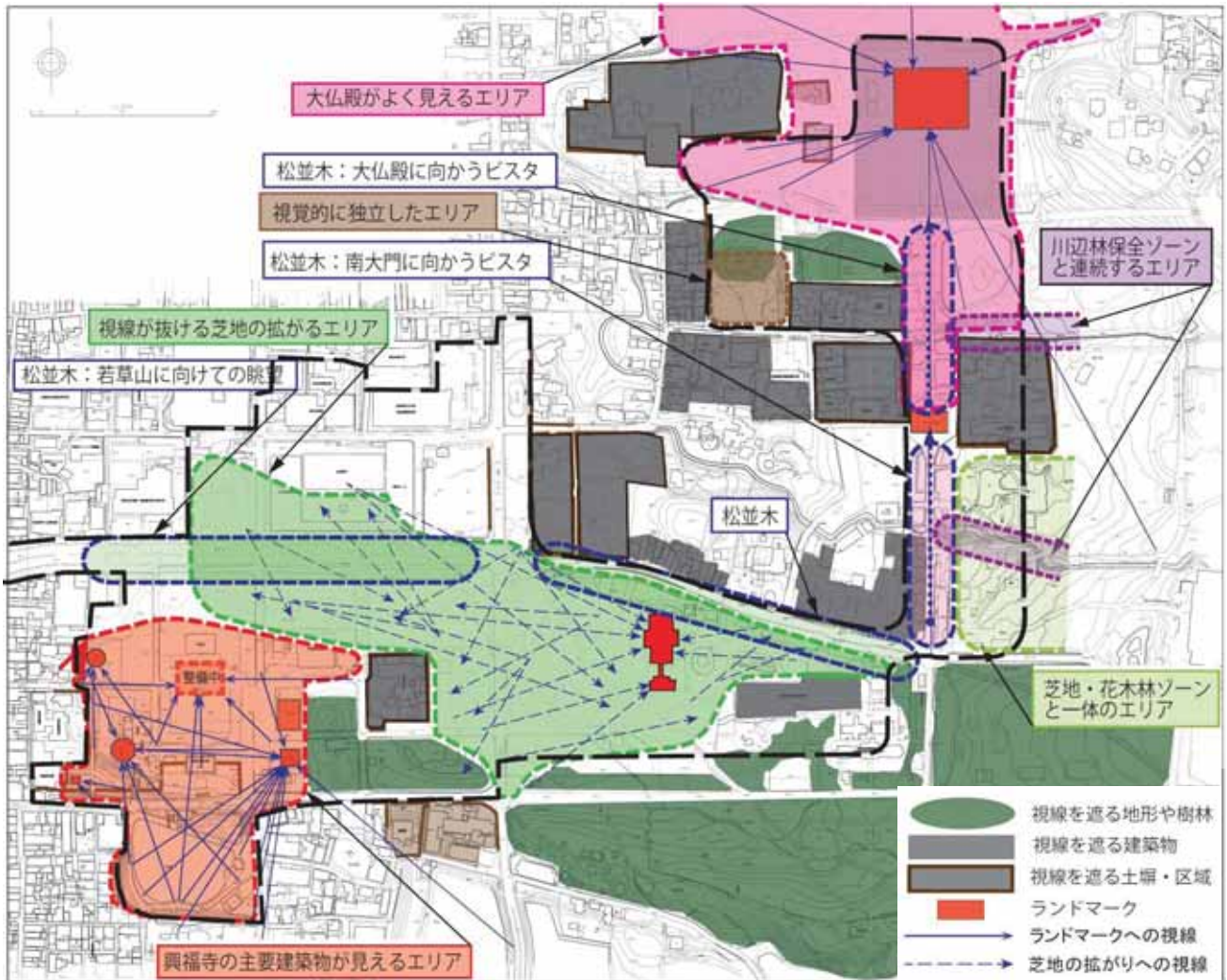
○土地利用、植栽、建築物の時代性は、興福寺と東大寺に関連する奈良時代から続くエリアと、都市公園や博物館等に関連する明治以降のエリアに大別される。



※時代区分は、建立・整備年代の他に様式・形式の時代性を参考に行った。○ 名木・いわれのある樹木

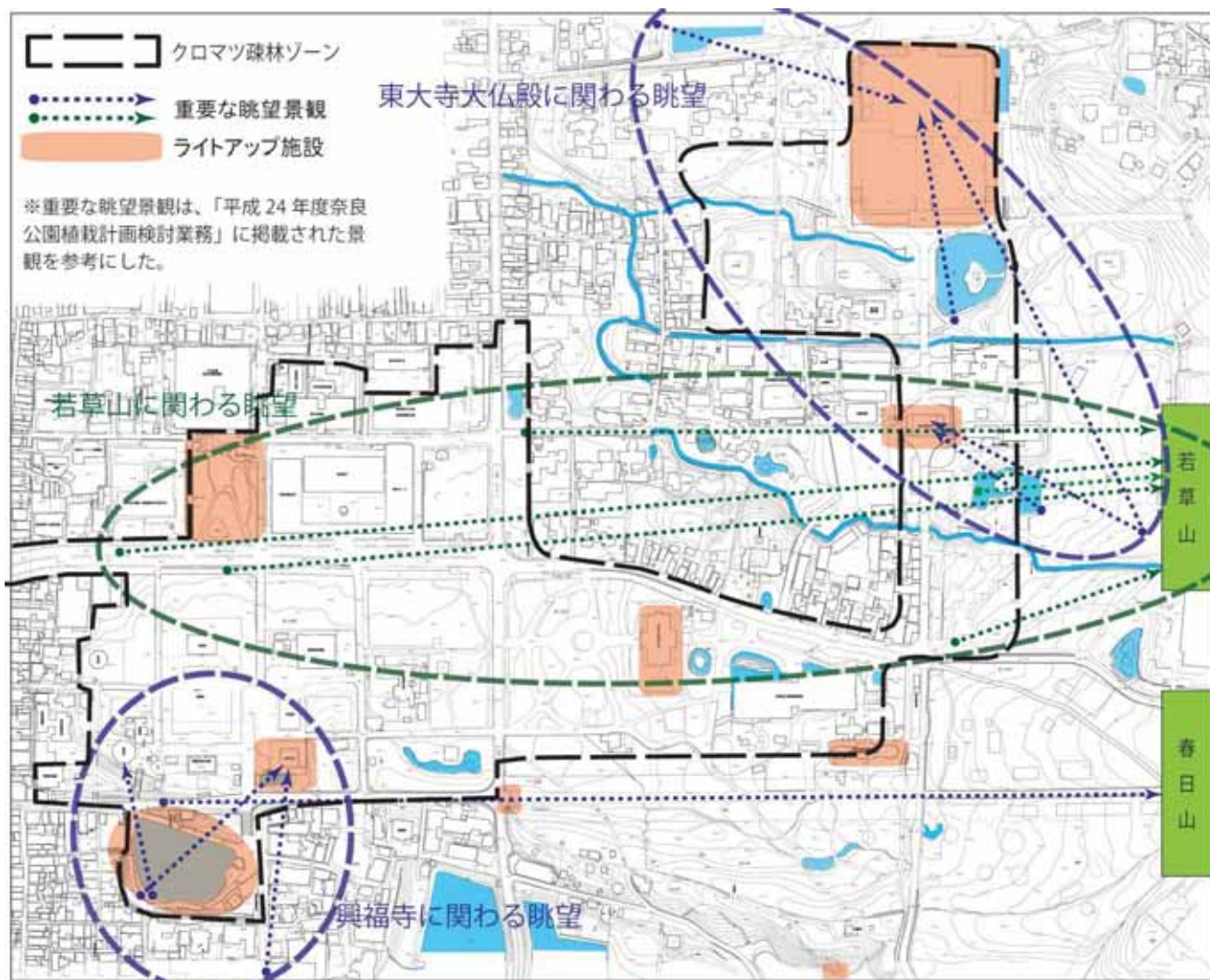
図：土地利用・植栽整備・建築(ランドマーク)の時代区分

○景観特性からみると、興福寺と東大寺（大仏殿）の境内景観のエリアと都市公園や博物館構内等の開放的な景観のエリアに大別される。



図：ランドマークや景観特性によるエリア区分

- ・興福寺と東大寺（大仏殿）の境内は、建築物や土塀、地形変化等によって視線が制限されており、ランドマークとなる歴史的建築物に視線が集まる。境内には芝地はあるものの限定的で、敷地外に視線が抜ける箇所は少ない。
- ・都市公園と博物館構内は、一部に建築物があるものの、密度の高い松林と芝地の拡がり連続しており、周囲に視線が抜ける。

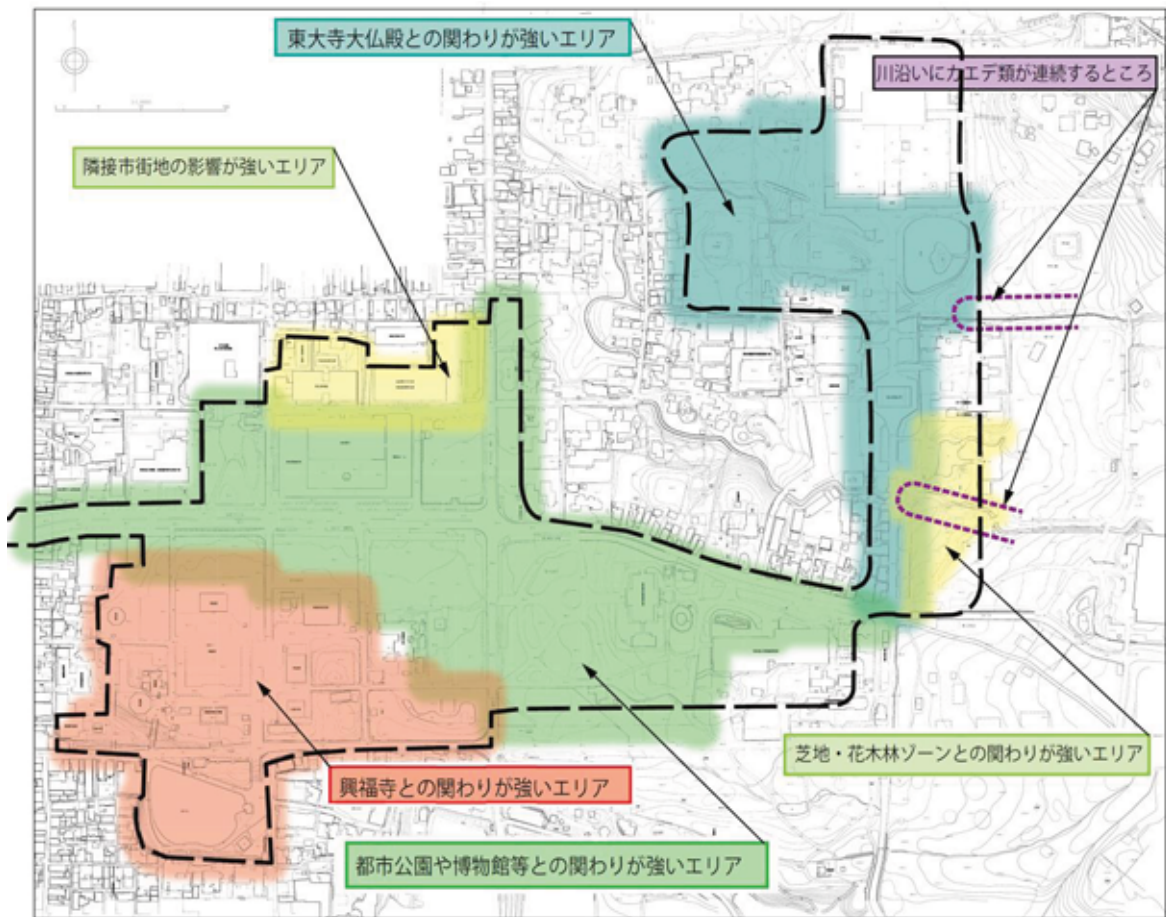


図：重要な眺望

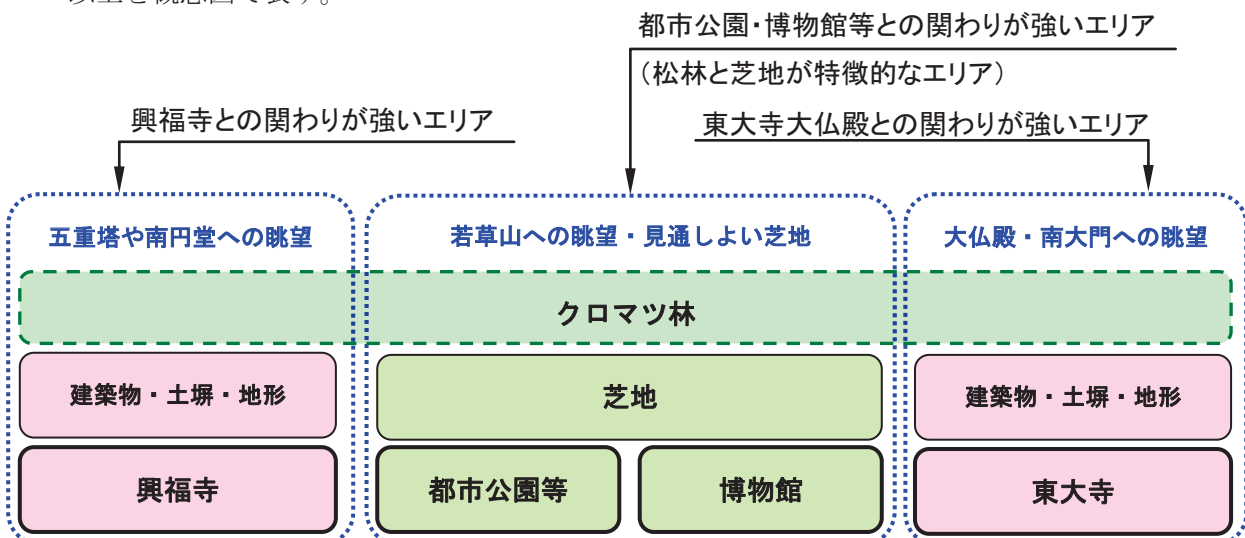
- ・重要な眺望は、興福寺に関する眺望、東大寺大仏殿に関する眺望、若草山に関する眺望に大別することができる。
- ・興福寺と東大寺の境内及び隣接地に位置する眺望点のアイストップはランドマークとなる歴史的建築物であり、これらの眺望点の前面には池水面(芝地ではない)があり、これによって眺望が担保されている。
- ・都市公園内や隣接道路に位置する眺望点のアイストップは若草山であり、これらの眺望点の前面には芝地又は道路面があり、これにより眺望が担保されている。

特性まとめ

- ・クロマツ疎林ゾーンは、「興福寺との関わりが強いエリア」「東大寺大仏殿との関わりが強いエリア」「都市公園・博物館等との関わりが強いエリア」のエリアに大別される。
- ・「興福寺との関わりが強いエリア」「東大寺大仏殿との関わりが強いエリア」は、奈良時代から続く歴史的建築物や境内地としての土地利用があり、植栽や景観もそれが核となっている。
- ・「都市公園・博物館等との関わりが強いエリア」は、明治以降に土地利用・植栽整備されたものであり、「見通しの良い松林と芝地」が特徴となっている。
- ・いずれのエリアも古くからマツが見られ現在もクロマツが全体を覆い、それが景観の特徴となっている。



以上を概念図で表す。



図：空間構成の概念
資料2-35

2-2) ゾーンの計画方針

(1) クロマツ疎林ゾーンの計画方針

計画方針：

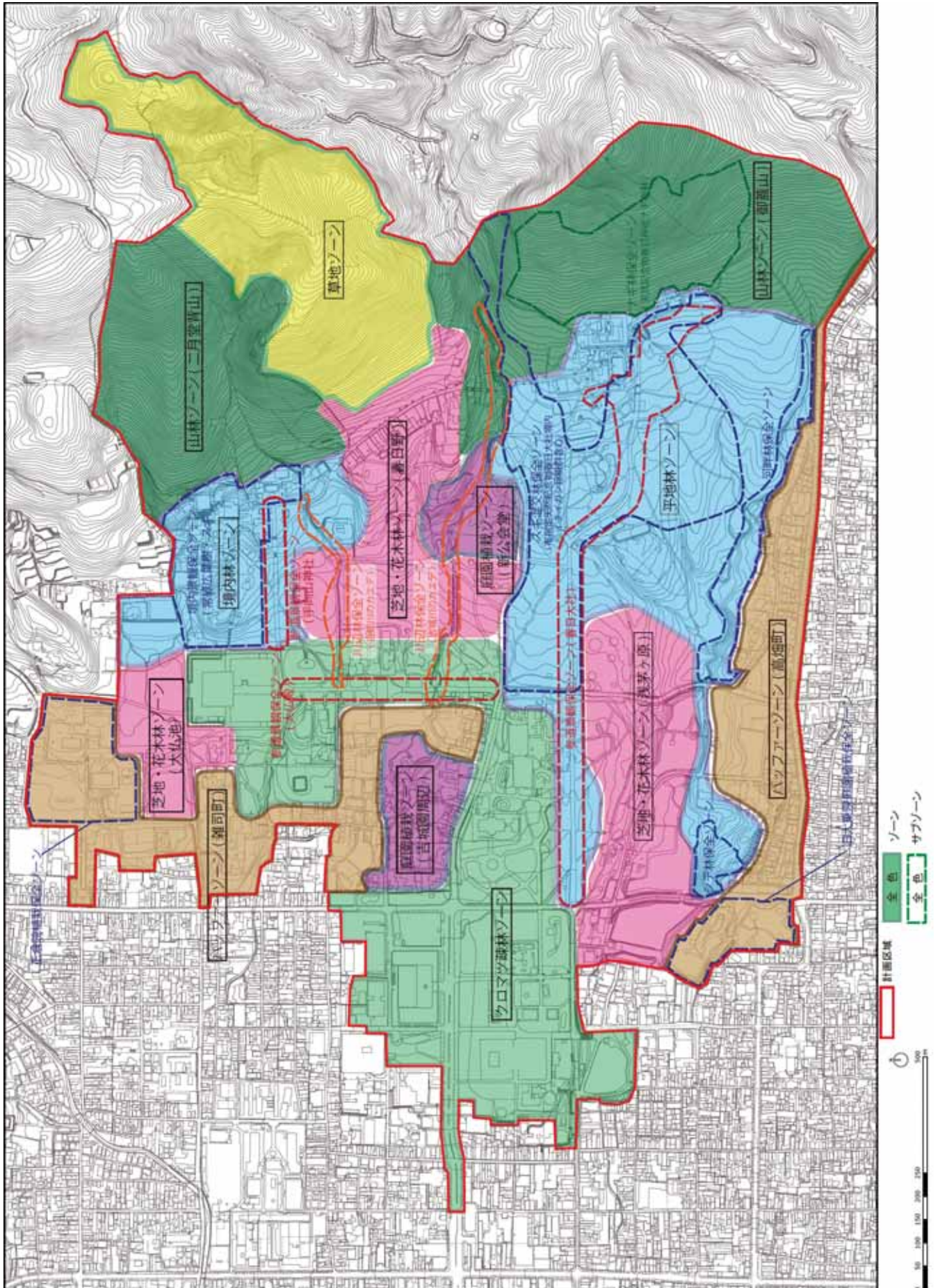
クロマツ疎林を基調として歴史・文化と調和した格調高い植栽・景観を保全・継承する。

前項 2-1) クロマツ疎林ゾーンの植栽の特性で記述したとおり、クロマツ疎林ゾーンは古くから風致を高めるためにマツやサクラなどが植栽され、現在もクロマツを主体とした植栽によって歴史文化的な風致景観が保全・継承されている。そして、土地利用や植栽整備の歴史が植栽や景観に色濃く反映されており、この視点から見ると「興福寺との関わりが強いエリア」「東大寺大仏殿との関わりが強いエリア」「都市公園・博物館等との関わりが強いエリア」という3つのエリアに大別される。これらは、奈良公園の歴史文化そのものであり、奈良公園の魅力の最も重要な構成要素である。

よって、クロマツ疎林ゾーンは“クロマツ疎林を基調として、歴史や文化と調和した格調高い植栽とそれによって形成される良好な景観を保全し、これを継承する”ことを計画方針とする。

この計画方針図では、上記この3つのエリアそれぞれについて植栽の計画方針を設定するとともに、エリアにまたがって検討すべき重要事項や隣接ゾーンやサブゾーンとの関わりなどについての配慮すべき事項についての考え方を示す。

参考に奈良公園全体の植栽ゾーニングを示す。



図：植栽ゾーニング図

(2) 計画方針の歴史性についての考え方

計画方針図に記述されている“歴史性”については、植栽の計画目標を設定するという観点から、その考え方を以下のとおり整理した。

① 興福寺旧境内：「天平伽藍に調和する植栽」

興福寺旧境内は、史跡の遺構である主要建築物の復元又は表示を進めており、天平時代の伽藍景観を復元することを目標としている。このため、これまで密度高く植栽されたマツやサクラの植栽は、遺構の発掘調査や建築物の復元・表示等により、伽藍中央部からは姿を消している。今後境内整備に伴い境内中央部の植栽地はさらに減少し、天平時代の伽藍景観の復元が進むことから、これに調和する植栽とする。

② 登大路、猿沢池、国立博物館本館、大仏殿参道付近：「明治以降公園植栽が良好に生育した大正～昭和（戦前期）を参考とする」

この範囲は、明治以降に公園として植栽整備が進められることによって、良好な風致景観が形成されてきたところである。明治以降現在までの多様な資料を調査した結果、その中で最も良好な植栽景観を呈していた期間は、おおよそ大正～昭和（戦前期）と考えられる。これは、以下の状況から説明できる。

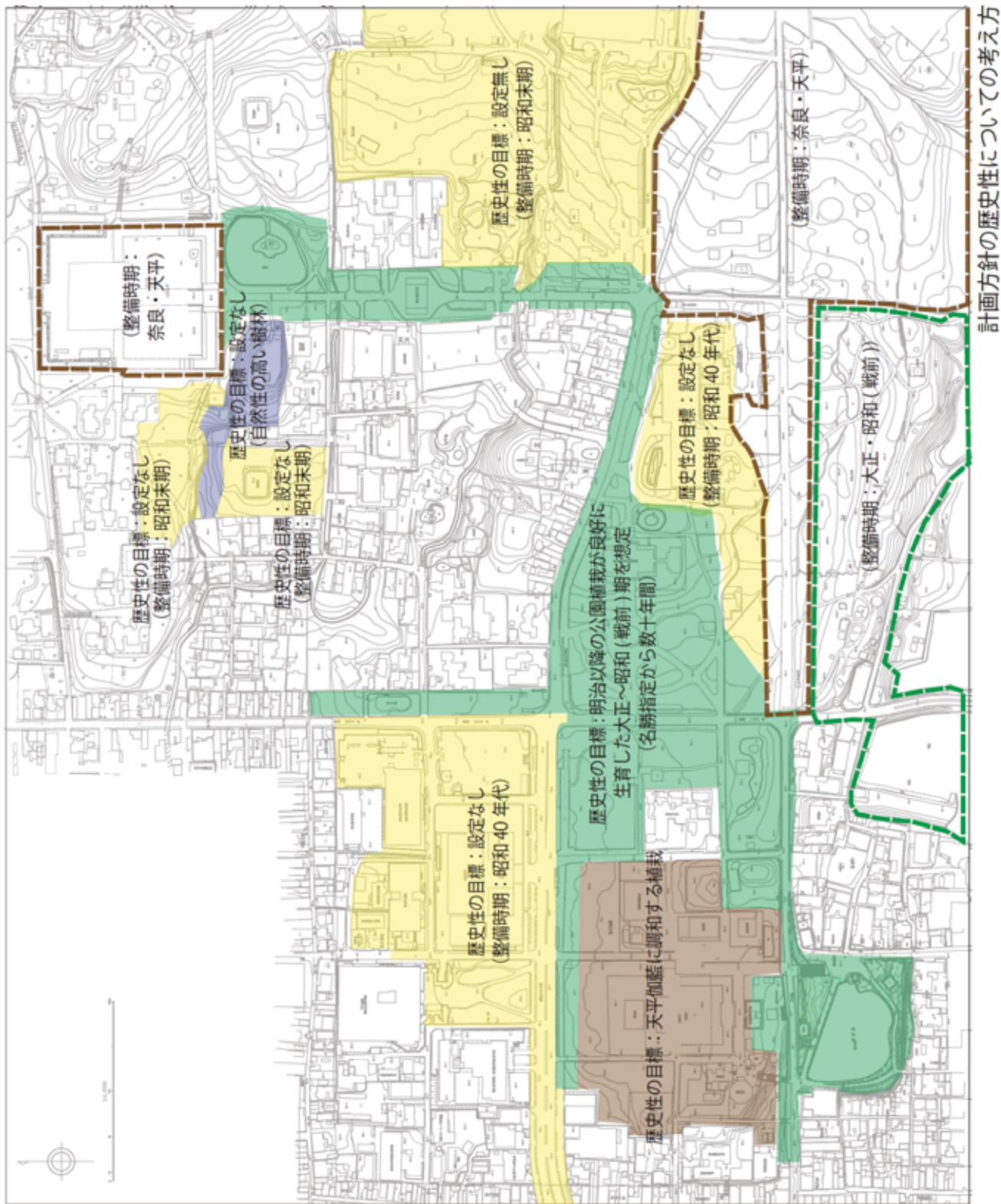
- ・対象範囲は奈良公園及び国立博物館として明治 30 年頃に様々な植栽整備が行われており、大正～昭和（戦前期）は 30～50 年経過し十分に樹木生長した良好な時期にあたる。
- ・名勝指定は大正 11 年であるが、指定後は戦後になるまで大きな植栽整備は行われていない。つまり、その期間はおおむね良好な植栽景観であったために、新たな植栽整備が不要であったと考えられる。
- ・昭和（戦後期）の奈良公園は、台風被害とマツクイムシ被害で大きなダメージを受け、その枯損を補うために膨大な植栽を実施した時期で、植栽景観は激変しており良好な状態とは言いがたい。
- ・近年は、戦後植栽されたシイ、カシ、クス等の常緑広葉樹が生長し、眺望景観の阻害や見通しの悪化、被圧による花木類の生長不良等が生じている。

以上のことから、対象範囲がこれまでで最も良好な植栽景観を呈していた期間はおおよそ大正～昭和（戦前期）であり、歴史・文化と調和した植栽・景観であったと考えられる。

なお、計画検討にあたっては、大正～昭和（戦前期）の植栽を復元することを目標におくのではなく、当時の樹種構成や密度、配植、景観イメージの良好な要素を参考にして、計画目標を検討することとする。

③ 県庁周辺、国立博物館新館、東大寺大仏殿西側など：設定無し

この範囲の植栽は、昭和 40 年年頃以降に整備されたものや、歴史性との関わりが希薄な土地利用であることから、隣接地との調和や自然性に配慮するものとする。



図：計画方針の歴史性についての考え方